

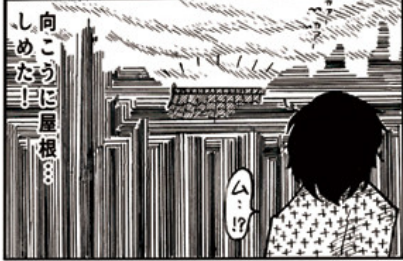
遊女恋歌



たきもと裕



時は 明治末
初夏
場所は 京都山中



向こうに屋根が
しめたる



△:!?



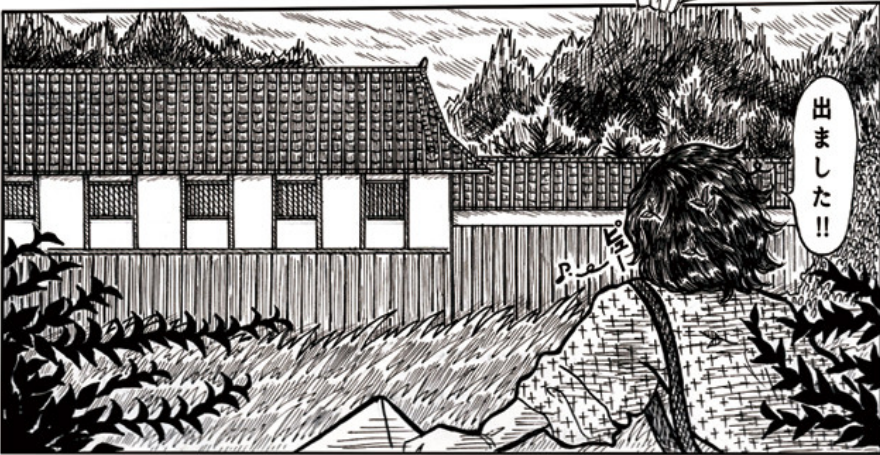
道に迷った
しまったか

ふらりと写生旅行に来たものの
蒸し暑さに頭はぼんやり
どこをどう歩いたかわからなくなった

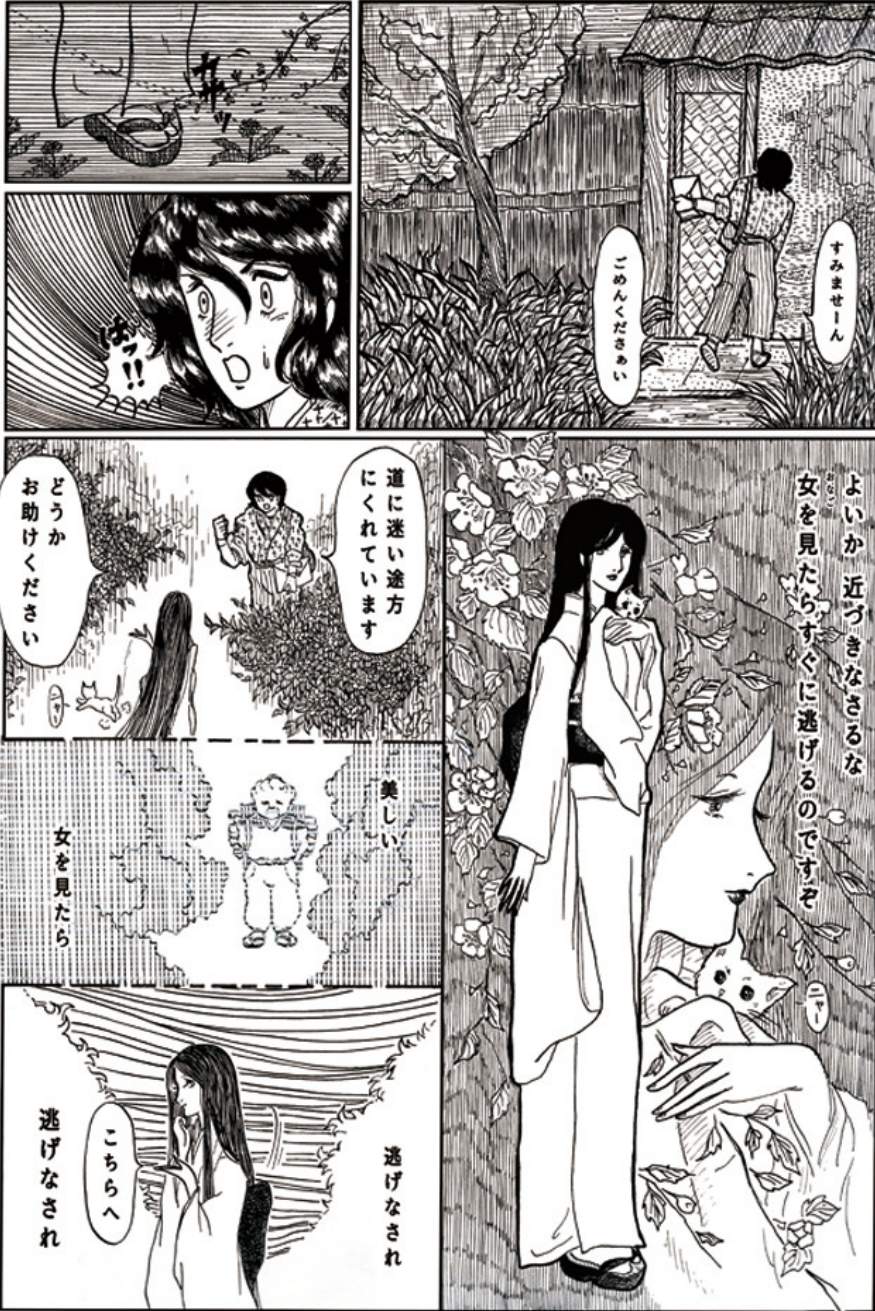


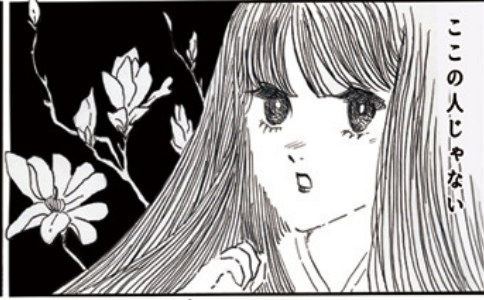
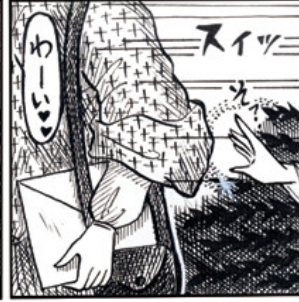
道で会ったバアさまが
魔物の住み家があると
言ったが…ままよ
この際から…まよの腹の
ほうが大事!

△:キエ!

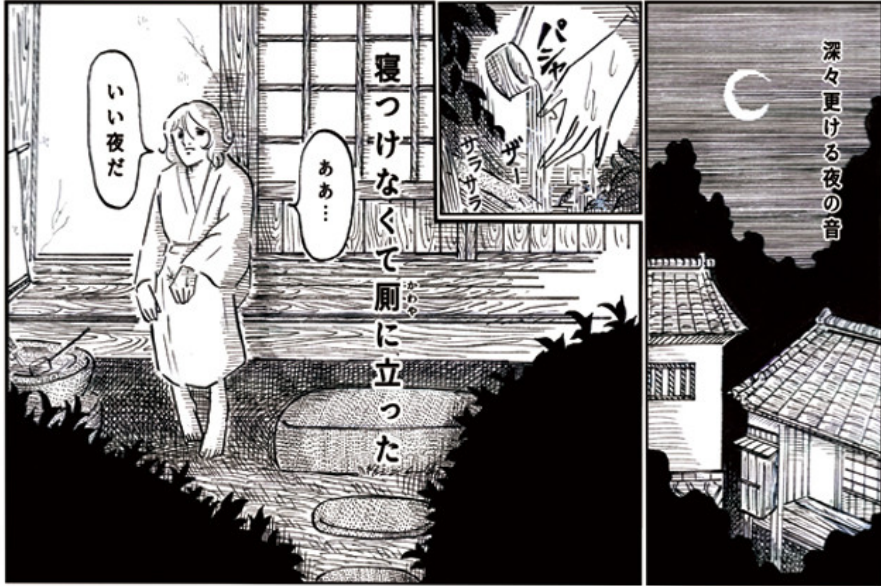


出ました!!





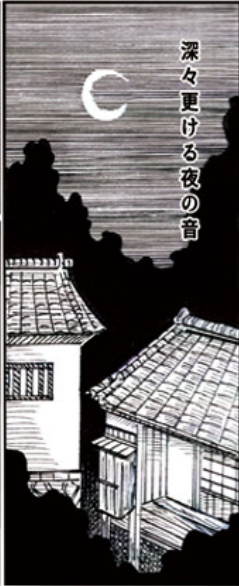




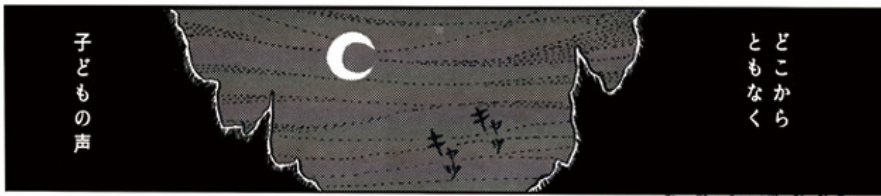
いい夜だ

ああ…

寝つけなくて
厠かまどに立たった



深々更ける夜の音



子どもの声

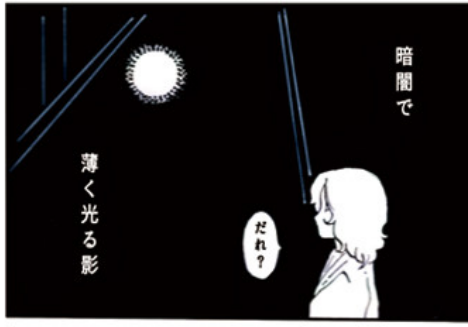
どこから
ともなく



ん？



夕方のあの
娘かしら…



暗闇で

薄く光る影

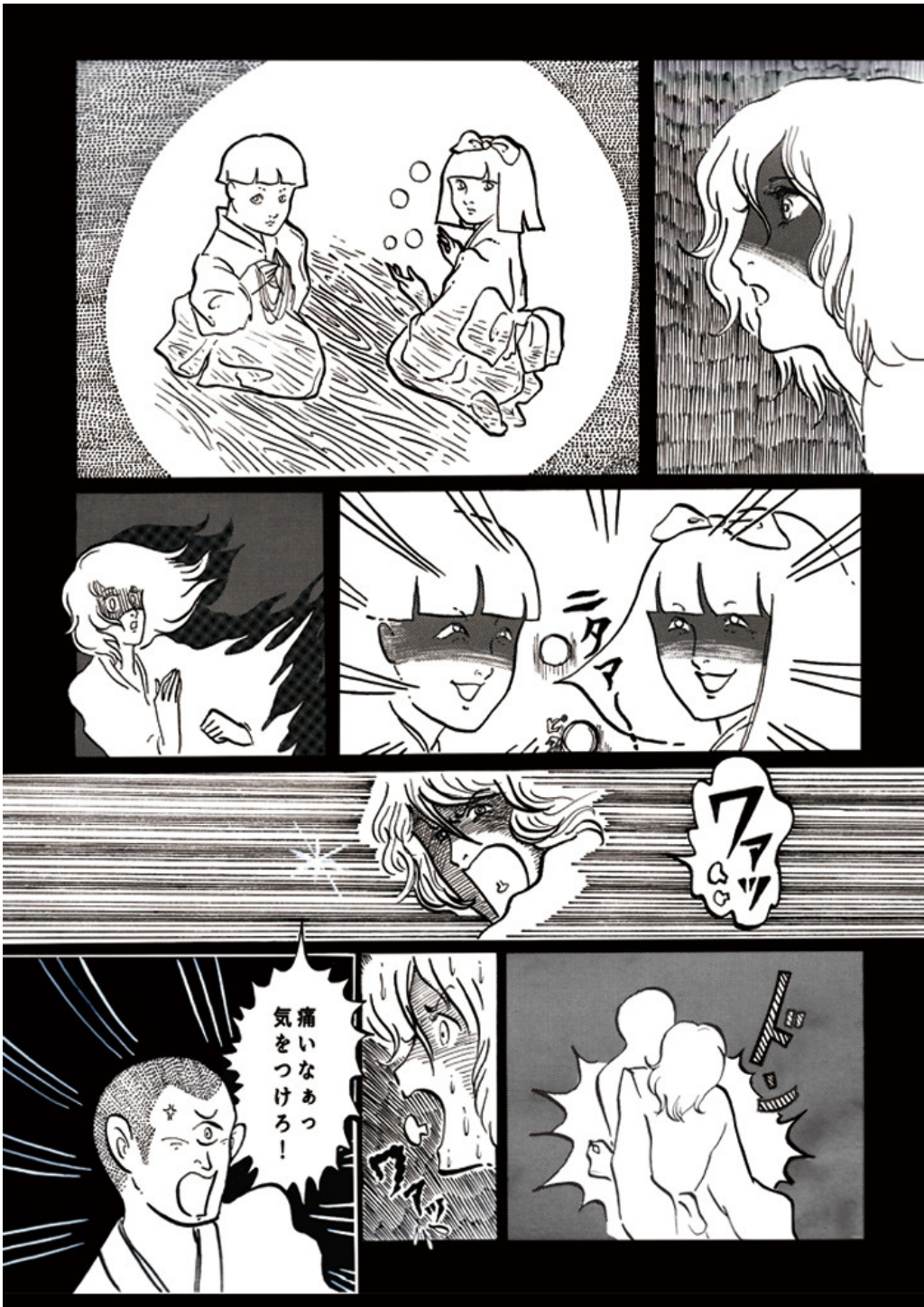
だれ？



どれどれ

彼女何も教えて
くれないけど
妹じゃないのかな

スア…スア…





物の怪の群れ

体が動かぬ

どうなる
どうする

われをどうする
物の怪どもよ

物の怪どもよ

あれは
あの娘じゃないか

旅の方 ババアの
言うこと
聞きなされ
魔性に惑わされれば
命を無くす



助けて

誰か…僕を
助けて…誰か…

バアさま
遅いもう遅い



昔

スルツ

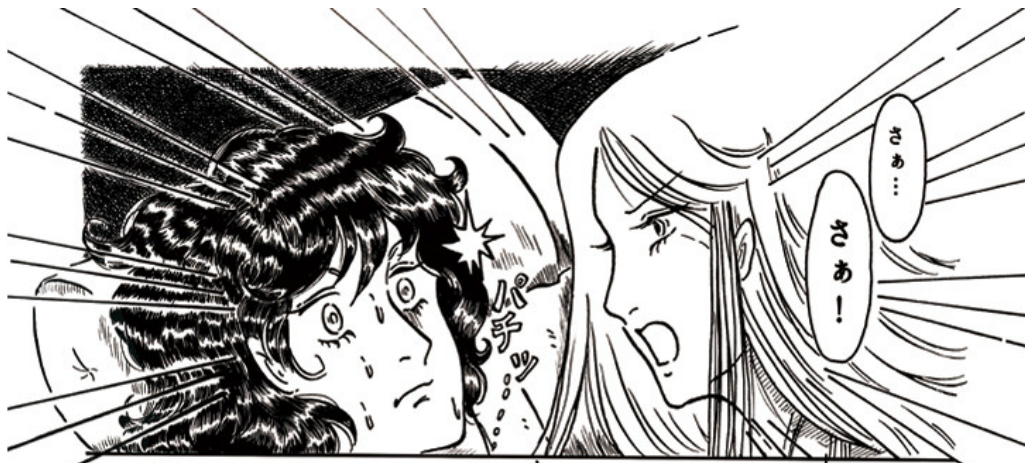
一人の遊女が
殺されたのですよ

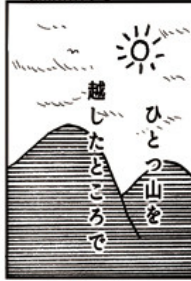
その怨みから
遊女は旅人を殺します
貴方も旅のお方……

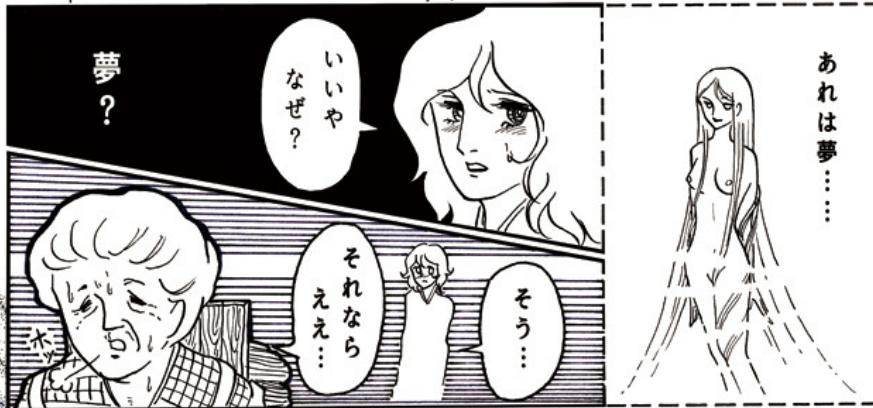
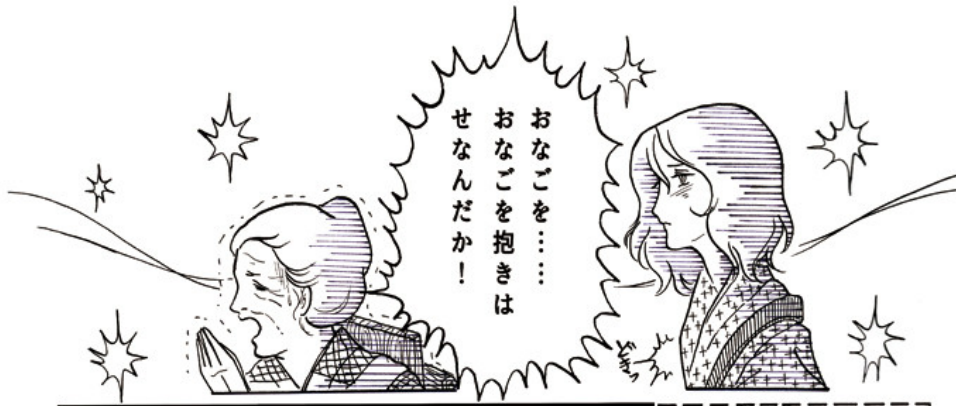
旅人にね

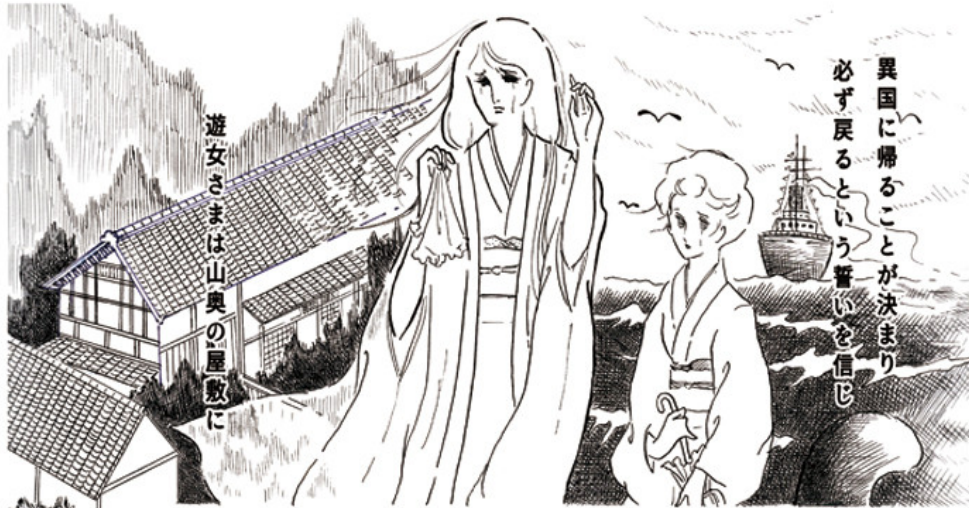
さあ……

死への宴に……さあ
お抱きあそばせ……
さあ……









遊女さまは山奥の屋敷に

異国に帰ることが決まり
必ず戻るといふ誓いを信じ



屋敷を飛び出して
しまわれた

おつきの子の言葉も聞かず



一年たったその夜に

ひと月たっても手紙は来ない
半年たっても返事は来ない

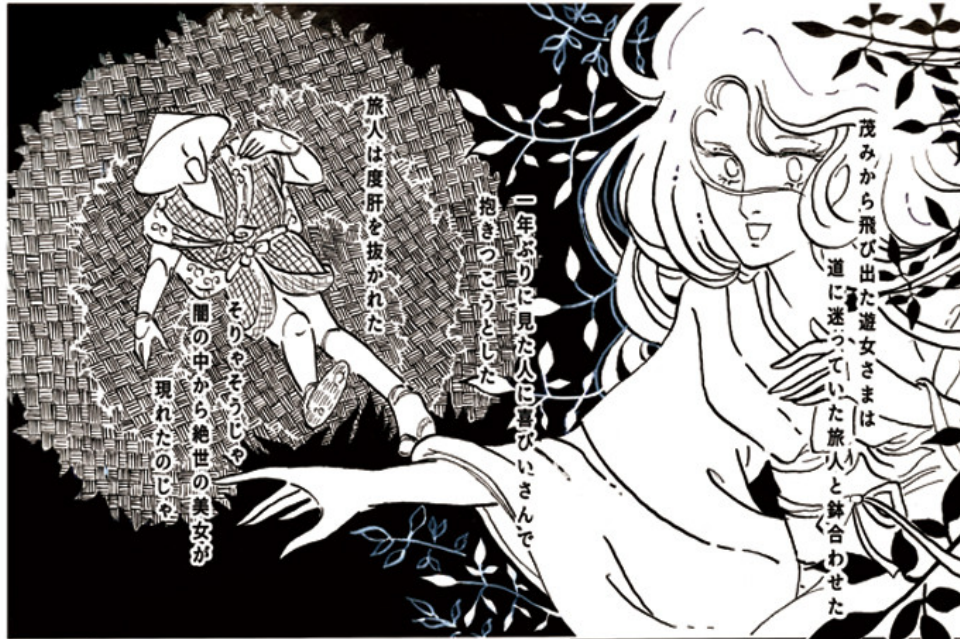


おつきの子は聞か
恐ろしくて着いて
行けなかった

ただただ怖くて

恐ろしくて

ついて行ったら
あんなことに
ならなかったかも
しれん



茂みから飛び出た遊女さまは
道に迷っていた旅人と鉢合わせた

「年ぶりに見た人に喜びいさんで
抱きつこうとした」

旅人は度肝を抜かれた

「そりやそりや
闇の中から絶世の美女が
現れたのじや」



のちに魔物が
空を飛んだと
旅人は言うた

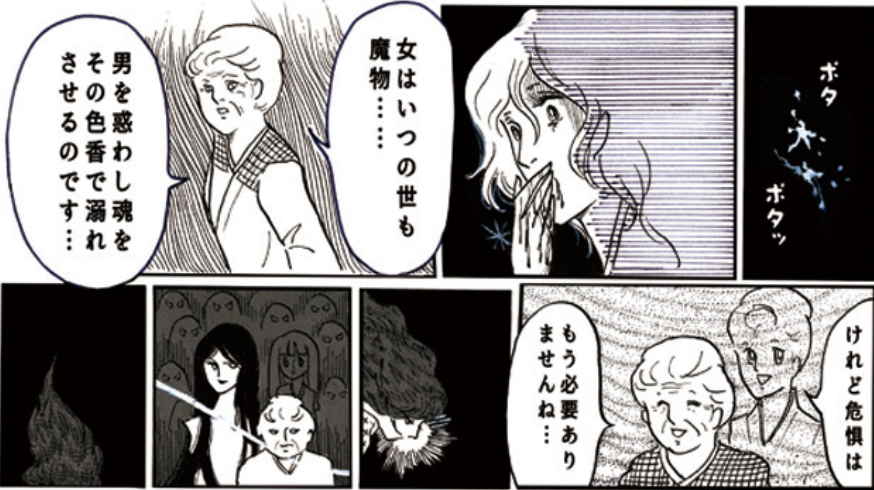


「魔物と思い
突き飛ばした」



翌日みつかったそのお姿は
それは哀れなものでした

「おつきの子は今も
生きながらえて
苦しんでおるそうです」



遊女恋歌

著 たきもと裕

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
